

---

# あなたと過ごした日々

ありま氷炎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あなたと過ごした日々

### 【著者名】

N4237S

### 【作者名】 ありま氷炎

### 【あらすじ】

「花の島の秘密」の登場人物花村マサシの両親の話です。\*ブログで完結後、なろうへ掲載します。

## あなたと遇った日々（前書き）

「花の島の秘密」の第3章後あたりにて、読むのがお勧めです。

## あなたと過ごした日々

あなたが初めて私の前に現われたとき、ただ怖かった。  
銀色の瞳から逃げたかった。

見つめられると自分が自分でなくなつた。

あなたはふいにやってきて私を見つめると深く口づけ、  
私の体に触れる。

「メグ//…」

あなたにそう呼ばれると胸が騒ぐのだ。

なんだろう。

なんでこんなに胸が騒ぐのだろう。

3

「つらいか？」

ある日、あなたがふいにそう聞いてきた。

行為以外にあなたが私に話しかけてきたのは初めてだつた。

私はなんと答えていいかわからず顔を上げた。

彼は私の顔を見つめると顔を逸らし、背を向け、白いシャツを羽織つた。

いつも着ているシャツ、それは学校の制服のようだつた。

「ここは夜は冷えるから。気をつけろ」

彼はそういつとつもと同じように空氣に溶けるように消えた。

彼は不思議な存在だった。

「大きくなつたわね。大丈夫？」

東守マコさんはそう言つてお腹を擦つた。

この島に来て、子供を宿して5ヶ月が経とうとしていた。

私に会いにくるのはマコミさんとアキオさんのお母さん、そして東守マコさん、そのご両親、あと北守ショーンイチさんだった。

ああ、あの人もたまに来る。

お腹が目立つようになつてから来る回数が減つたけど、ふらりとたまにやつてくる。

時間は真夜中だつたりと朝早くだつたりと誰も来ない時間だつた。

お腹が大きくなつて、お腹の子の鼓動を聞くよくなり私は変わつた。

これが私の運命だつたのかなと思ひよつになつた。

ただお腹の子が愛しかつた。

そしてあの人があるのが樂しみだつた。

「メグミ…」

夜、ふいにそう声がして目を開けるとあの人側に座つていた。私を悲しげな目をして見つめていた。そんな目をする彼を見たのは初めてだつた。

「すまない。本当に…」

彼は私の髪を優しく撫でながらそつと語つた。

お腹はすっかり大きくなつていて

あと2ヶ円ほどで生まれてくるはずだった。

「ありがとう」

私の言葉に彼は目を見開いた。

「ありがとう。あなたのおかげで私は愛しい子を生むことができる。子どもに会えるのが楽しみなの」

「メグミ…」

あの人�폰を開いて私を見つめていた。そして私を力強く抱きしめた。私の長くなつた髪に彼は顔をうずめていた。大きな人が小さく感じられた。私は包みこむように抱きしめた。

「タケシさん」

初めて私は彼の名前を呼んだ。

「メグミ」

彼は私の頬を優しく包むと口づけた。

それから毎日彼は来るよつになつた。

## あなたと過ごした日々②

彼は毎日来てくれた。

でもいつも真夜中だつた。

寝ていると名前を呼ばれ、目を開けるとあの人気が側に座つていた。

「メグミ」

彼はそう私を呼ぶと優しいキスをした。

「メグミ 僕は話さないといけないことがある」

ある夜、タケシさんはそう言つた。視線を縁側に向けていた。

子供が生まれるまであと1ヶ月近くだつた。

タケシさんから聞かされた話は信じられないものだつた。

出産したら数日で死んでしまう。

その事實を知つて私はおかしくなつた。

死ぬのが怖いわけじゃなかつた。

ただ愛しい子を残して死ぬのが嫌だつた。

毎日が苦しかつた。

夜な夜なくるあの人をなじつた。

あの人は私の苦しみを受け止め、抱きしめた。

そして

「お前が死んだら俺も死ぬ。ずっと一緒だ。」

そう言つて涙を流す私の頬に優しく触れた。

数週間後。

子供が生まれた。

かわいかった。

驚いたことに苦しみはほとんどなかつた。

生まれたばかりの子を抱いて、おっぱいをあげようとするとき分が悪くなつた。

子を抱く力が入らず、全身から力が抜けていくようだつた。

「メグミちゃん！」

マユミちゃんのお母さんが私を呼ぶのがわかつた。子が私の手から抜けた。マユミちゃんのお母さんが子を抱き上げるのを見た。

私はほつとした。

しかしその瞬間視界は真っ暗になり、「ぐんと頭が畳に触れたのがわかつた。

それがわかつたが何もできなかつた。ただ意識が薄れていき、なくなつた。

「メグミ、メグミー。」

私を呼ぶ声がした。目を開けるとタケシさんがいた。もう体を動かすこともできなかつた。

愛しい子を抱くこともできない。

それが悲しかつた。

「マサシは？」

「マサシ？」

「そう、あの子はマサシっていうの。かつここの名前でしょ」

悲しげなタケシさんに私はそう言つた。

「マサシ…マサシはマコが世話をしている

「マコさんが？」

「ああ」

タケシさんはうなずいた。

東守マ「さん、あの人なら大丈夫、..

タケシさんを好きな人、きっとタケシさんに似たマサシをタケシさんと一緒に可愛がってくれるわ。

「髪の色が銀色だな」

タケシさんがポツリとそう言つた。言われてみて初めて気がついた。枕元に見える自分の髪が銀色になつていた。

「本当、すごい。タケシさんの瞳の色と同じ色ね。マサシも銀色の瞳よね。嬉しい。私たち繋がっているのね。銀色の髪で死ぬのね。これで私はさびしくないわ」

私がそう言つて微笑むと彼は私を抱きしめた。泣いている気がした。「お前が死んだら俺は生きていけない。1人では死なせない。安心しろ」

「そんなこと言わないで。マサシのために生きて。お願ひ

「できない」

タケシさんはそう言つて私を抱きかかえると立ち上がつた。「いい場所に連れていくてやる。きれいな場所だ」

戸惑つ私を抱いたまま、彼は飛んだ。

優しい風が吹いて着いたところは山の上の花畠だった。

一本の大きな木が立つてあり、その周りには色とりどりの花が咲いていた。

「きれい」

私は涙が出るのがわかつた。夢のような光景だつた。

これが花の島と言われるゆえんのかと思つた。

「メグミ。愛してる。こんなに人を好きになったのは初めてだ。そして多分最後だ」

その言葉に私は目から涙が溢れるのがわかつた。

そしてタケシさんに答えようとしたら急に目の前が暗くなつた。

何も見えなくなつた。

遠くでタケシさんが私を呼ぶのがわかった。

田が覚めると部屋に戻っていた。

部屋には誰もいなかった。

呼吸が苦しかった。

多分もう少しで死ぬのがわかった。

声が出せなかつた。

このままじゃ何も伝えられない。  
タケシさんにまだ答えてない。

動かない体の代わりに視線を動かすと本棚の下のほうに私の日記が  
見えた。

私は体の力を振り絞つてそこまで這つていった。  
そして日記を手に取つた。日記にはいつものようにペンが挟まれて  
いた。

私は座敷に転がつたまま、震える手で書きつづつた。

愛するタケシさんとマサシへ言葉を残したかった。

私が幸せだったこと、二人を愛したことなどを伝えたかった。

タケシさん、

愛しています。

だから死なないで。

お願ひ。

私のために生きて、マサシのために生きてください。

私はそう書き終わると日記を閉じた。  
気が遠くなるのがわかつた。

脳裏に次々と映像が浮かび上がった。

ああこれが死を迎えるときに見ると、いつ走馬灯の映像かと思つた。

優しい両親の姿が見え、その側にまだ小さいノゾムの姿があつた。  
心配してゐるだらうな。

ノゾムは私がいなくともちゃんとやつてるかな。

大丈夫よね。

両親とノゾムの姿が消え、マコミナちゃんとアキオさんの姿が現れた。

大丈夫。

心配しないで。

心配そうな一人に私はそう言わずにはいられなかつた。

一人の姿が消えると美しい花畠の映像が現れた。

それは最後にタケシさんに連れて行つてもらつた花畠だつた。

美しい幻想的な花々。

そして美しいタケシさんの姿が見えた。

愛しています。

これからもずっと。

私がそう言つとタケシさんは花畠の中へ優しげな微笑を浮かべた気がした。

ああ、これでもう大丈夫。

あなたに会えてよかったです。

ありがとうございます。

マサシをお願いします。

そこで私の思考はすべて止まつた。

突然目の前が色鮮やかになつた。

色とりどりの花びらが一気に空に舞い上がりて視界一面に広がつていった。

そしてそれは優しく私を包みこんだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4237s/>

---

あなたと過ごした日々

2011年7月13日16時43分発行